

ば内外の醫療術を盡しけれども、その志るしなく、唯弱りに弱らせ給ひ、○中重次多○本御枕に取  
つきて泣々申けるは、殿も定めて覺えさせ玉ひなん、重次がむかし此病をうけしに、たち所に去  
るし得し良醫の候彼を召して、見せ試み給ふべしと申す、諸醫既に手をつかね、家康また死を決  
す、この上醫療其詮なし、且は命をしむに似たりとて、用ゐ給はず、重次大に怒つて、○中年老たる  
重次が御跡にさがつての御供、かなふべからず、さらば御先へ參らんとて、御前を罷立、徳川殿大  
におどろかせ給ひ、あれ止めよと仰ければ、近く侍らふ人々走り出引と、め仰らるべき旨あら  
せられ候といふ、○中汝がいふ所、ことわり至極せり、さらば醫療の事は、汝が心にまかすべし、天  
命既に至りて、家康空しくならんとも、汝もまた家康が心に任せ、いかなる恥を見つべしとも、一  
日も生殘て、後の事よきに計らふべしと存するや、いなやと仰ければ、重次が申旨に任せられん  
には、重次いかで又仰をや背くべきと申す、さらば醫師めさせよとて召さる、醫師やがて參て、御  
灸治よろしかるべしと申せば、重次、艾とつてすうる、御灸の痛み、覺えさせ給はねば、艾を増し加  
ふる事多くして、後いさゝか痛ませ給ふよし仰ければ、藥をつけて參らせ、御藥湯をも進め奉り  
しに、其夜の中に、御腫物潰れて、膿水血おびたゞしう流れ出で、御惱み立ち所に輕ませ給へば、重  
次は嬉し泣きに、聲を限りに泣く、御前伺候の人々も、感涙を共に流しけり、

〔寛政重修諸家譜三百九〕

長政○中

明國沈惟敬をして和をこひしかば、長政等名護屋の陣營に

至りて、このよしをつぐ、太閤これを許容ありといへども、いまだその事と、のはず、明兵日々  
くは、り、後援の將渡海せざりしかば、先手の諸將加勢をこふことしきりなり、こゝにをいて太  
閤、東照宮および前田利家等と日夜軍議あり、時に太閤みづから彼國にをしわたりて、征伐せん  
とありけるに、諸將あへて口をひらくものなし、長政ひとりいさめていはく、みづから渡海あら  
んは、國家の亡ぶべきはしなり、今日船を出したまは、明日はかならず國々に凶徒おこるべし、